vol.37 遺品整理業のパイオニア、キーパーズ　代表取締役・吉田太一氏

業界を牽引するトップに、事業成長の裏側やビジネスのポリシー、業界への思いなどを聞く「TOP Point of View ～ 供養業界トップインタビュー」。今回は、遺品整理業のパイオニア、キーパーズの代表取締役 吉田太一氏にご登壇いただいた。

「遺品は故人を支えた家財道具」社会の危険信号“孤独死”どのように対応して、どう生きていくか。

2002年に日本で初めて遺品整理を専門とする会社として設立されたキーパーズ。遺族に“ゆとり”を提供する企業として、全国各地の約35,000件のご遺品整理をサポートしてきた。

（インタビュー記事、P20へ続く）

part 1

TOP Point of View
供養業界トップインタビュー
vol.37

「遺品は故人を支えた家財道具」社会の危険信号“孤立死”どのように対応して、どう生きてくか。

遺品整理業のパイオニア、キーパーズ有限会社　代表取締役・吉田太一氏

業界のトップにお話を伺い、明日の事業につながるヒントを探す「TOP Point of View 供養業界トップインタビュー」。第 37 回は遺品整理業のパイオニア、キーパーズ有限会社 代表取締役の吉田太一氏。業界の第一人者である吉田氏に遺品整理の意義をはじめ、孤立死・多死社会など、これからの時代の向き合い方を、弊社 代表取締役社長 COO の小林史生が伺った。

吉田　太一（よしだ・たいち）

1964 年　大阪府生まれ
1983 年　大阪市立桜宮高校卒業
1988 年　佐川急便入社
1994 年　吉田運送創業（大阪）
1996 年　引越し屋のリサイクルショップを始める
2002 年　遺品整理会社「キーパーズ」を設立（名古屋）
2006 年　書籍「遺品整理屋は見た！」を扶桑社より出版
2011 年　著書「遺品整理屋は見た！」がフジテレビでドラマ化
2011 年　キーパーズがモデルとなった小説「アントキノイノチ」（さだまさし著）が映画化され、モントリオール映画祭でイノベーションアワード賞受賞
2011 年　書籍「私の遺品お願いします。」を幻冬舎より出版
2012 年　東京都大田区にキーパーズ有限会社本社移転
2015 年　書籍「あなたの不動産が「負動産」になる」をポプラ社より出版

日本初の遺品整理サービス

小林：遺品整理の会社を設立されて今年で 20 周年を迎えられますが、遺品整理の仕事を始めた経緯を教えてください。

吉田：私が 30 歳のころ、大阪で引っ越しセンターを経営していましたが、人と同じことをしても面白くないので、少し変わったことをしたいと常に考えていました。

やがて、引っ越しで不要な物が出るのに、なぜ引っ越し屋さんがリサイクルショップをやっていないのか、ということに気がつきました。そして、第三者を巻き込んでリサイクルショップを運営することで、お客様も引っ越し屋さんも誰も損をしない仕組みができると考え、全国初となる「ひっこしやさんのリサイクルショップ」を始め、関西ではよくテレビ取材を受けていました。それから 8 年たったある日、二人の女性から見積もりのご依頼があり私が訪問しました。依頼内容は東京と横浜に荷物を運ぶ仕事でした。しかし、配送するもの以外にもたくさんの家財が有ったので、どうされるのかとお聞きすると、これからリサイクルショップや便利屋を探して荷物を処理していくとのことだったのです。そこで私が「全部私がお手伝いしましょうか?」と話すと、女性二人はびっくりして「全部やってくれるなんて神様に見える」とおっしゃったのです。私のほうが“神様に見える”なんて言われて、一瞬この方は何を言っているのだろうかと戸惑いました。その後お話を聞くと亡くなった父親の遺品だったということがわかりました。

遠方に住んでいる遺族が、一人住まいだった父親の遺品の整理をすることが大変な作業なんだということに気づいたのです。私はその後、会社へ帰り遺品を専門に片づける会社を探してみたのですが、そのような会社はなかったので、日本初の遺品整理の専門の会社を創ろうと考えたのです。

小林：お客様との出会いから遺品整理サービスが始まったんですね。

吉田：そうですね。その時私が見積もりに行ってなければこのサービスを考えていなかったかもしれませんね。その後私はご遺族に対して困っていること全てを請け負うサービスでないといけないと考えてサービスの内容を作っていきました。また、ただの便利屋さんやゴミ屋さん、リサイクルショップとは違う遺品整理専門会社でなければならないわけですので何が違うのかを明確にしなければならないという強い意識はありましたね。

さらに遺品とはなにかを考えたのです。遺品とは故人の生活を支えていた家財道具です。人は亡くなると故人となりますが、家財道具はマイナスイメージのある遺品と言われます。物としては何も変わらないのに‥‥。ペットだったら、飼い主を亡くして可哀想だからと引き取り手がすぐに見つかるかもしれません。でも、故人の家財道具だったら気持ち悪がられることも多いのが実情です。しかし、遺族の遺品なら大切にできるけど、他人の遺品は気持ち悪い。有名人の遺品だったらお金を出してでも欲しい人がいる。同じ物でもイメージは全く違いますよね。人の感覚はいい加減なものです。出来れば遺品のイメージを良いように変えたいと思っています。

また、遺品は故人の生き様を物語っているといえます。現場に行くと会ったこともない故人の趣味や嗜好などが遺品の遺された部屋を片付けているとわかるのです。ですので、遺品整理は最後の最後に故人の生き様を消し去る作業だといえるのです。

これからの社会との向き合い方

小林：孤立死や空き家など、いまの社会が抱える様々な問題についてはどのようにお考えでしょうか。

吉田：時代によって生活スタイルは変わるのが当然です。昔は家業を継ぐとか長男だから何か任されるなど、慣習によって煩わしいことが当たり前にあって、その煩わしさを我慢する方が生きやすい社会でした。でも、今は考え方や生活スタイルの変化によって煩わしさを我慢しても何もメリットがない時代となったのです。いまの人が欲を追求していくと昔のような生活スタイルは否定されます。一人で生活する人が多い時代だから、人間関係も昔みたいにこだわらなくても生きていけます。

でも実際に、私たちがお手伝いさせて頂く遺品整

理の中でも部屋で孤立死される方は年間400件程います。また孤立死というと高齢者が自宅で一人で亡くなるイメージがあるかもしれませんが、年齢は年々低下していて、50代の孤立死も増えています。65歳以上になると自他ともに高齢者としての認識に変わりますが、その手前の世代が危ない。仕事場では人間関係はあるが、プライベートで友人がいないという方が非常に多いです。

生活はワンルームマンションやコンビニ飯の充実によって快適になり、携帯やPCでネットを介して繋がりがあるように錯覚してしまう。企業側も一人の方が便利で快適だというサービスや商品を促進しているので、社会構造は今後さらに変化していきます。結婚している方が「変わっているね」なんて言われる時代になるかもしれません。今の20代、30代の若い世代でも、両親が一人っ子で自分も一人っ子の場合、未婚のままだと将来親が亡くなったら本当に身内のいない一人となります。そうなると誰にも葬儀や遺品整理の手配すらしてもらえないのです。身内がいないのである程度の年齢になったら自分の最期の手配は第三者に依頼しておかないと死ねないということになるのです。

また宅建士の資格も取って不動産業も行っておりますが、全国の遺品となった実家の空き家が激増している実態を目の当たりにして驚いています。子供に資産を遺すために35年のローンで買った不動産が、子供は住まない、売れない、貸せないという“負動産”になってしまっているということも多く、相続で頭を抱えるご遺族も激増するでしょう。人口が減少に転じ、需要と供給のバランスが崩れるとこうなることは不思議なことではないのですが、不動産の相続が発生する可能性のある方は、事前に調べておいたほうがいいでしょう。

小林：確かにそうですね。危険ですが、煩わしい方向に戻るより楽な方に向かうのが自然な流れといえますね。

吉田：このような社会の変化に対して、どうやって対応していくか。どう生きていくか。どのようにリスク回避していくかを一人一人が考えなくてはいけません。社会の危険信号がいまの孤立死だと思います。

私は仕事で孤立死の現場を目の当たりにしたとき、亡くなられた方から「自分みたいになるなよ。こうなったら駄目だと伝えてくれ」というメッセージを伝えてくれと言われているように感じています。死んでしまえば自分ではわからないでしょうが、最期は人に迷惑をかけるような死に方は出来るだけ避けたいですよね。だから、たとえ一人でもいいから友達といえる人間関係を保つようにしてほしいと思うのです。結局、自分が今後どう生きるのかを、一度でもいいから立ち止まって考えるきっかけになればと思い、講演などを通して発信しています。

社員教育について

小林：社員教育について、具体的にどのように行われていますか？

吉田：基本的にはほったらかし経営です(笑)。私がなにかを教えるというよりは、みんな生きるために働いているので、自分で考えて行動することが大事だと思っています。あとは、ご遺族が私たちを育ててくださいますね。本当に困った時の心からの「ありがとう」の言葉は、人から頼られているということ、自分の存在価値が認められている、ということが実感できる貴重な経験になります。誰かの役に立てる仕事ができると、もっとこうしたいという気持ちが自然と湧いてきます。現場を経験すると社員の気持ちに変化が出てくるように感じています。

小林：吉田社長は本の執筆やメディア出演でご自身の思いを語られることが多いと思いますが、会社設立当初は一般の方に認知されるまでにご苦労があったと思いますが、いかがですか？

吉田：求人では困りましたね。聞いたこともない遺品整理会社ということで最初は求人が全く来なかったんです。大手求人広告に掲載した時には面接に来た人から、ここは何をする会社なのかとか、採用通知を出しても逆に考えさせてくださいと言われるような状況でした。創業一年からテレビ取材や出演依頼は多くて、その番組を見た人からの求人の応募が多かったのですが、こちらの都合良いタイミングでテレビに出られるわけではないので、無料で出来るブログを知り現場での現状や私の考えを配信し始めました。1年程ブログを書き続けた結果、まったく求人は来なかったのですが、有名ブログとなり数社の出版社の方から連絡があり、書籍として出版することになりました。出版後、すぐにアマゾンで4位になるほど注目されベストセラーと言われるようになって私もびっくりしました。その後、いろいろな出版社から執筆依頼されて十数冊の自著を出版することになりました、自分でも不思議な気もしますが、現在も日本ペンクラブという作家の会にも入っているのです。その数年後から本の読者の方々が求人募集に来てくれるようになりました。読者の方は私に共感して来てくれるので、思いの近い人たちが会社に集まりますよね。それが顧客満足度の高さに繋がっていると思っています。実は、キーパーズのスタッフは全員、元々私の本の読者さんたちなんです。

小林：吉田社長のように思いを形にされて、積極的にメディア露出されることで業界のイメージも変わりますし、社会をより良くしていきたいという強い思いが伝わりました。

吉田：業界をどうのこうのなんて大それたことは考えませんが、せめて遺品整理業と名乗っている会社は、常識に則って事業を行い、辻褄の合わないことはしないで頂きたいと願うだけですね。客観的にみて辻褄が合わないことはできないですよね。私は遺品整理以外にも不動産会社や飲食店などの事業を行ったり、講演などの活動をしていますが、基本はサービス業ですから自分目線でなくお客様目線で辻褄が合っているかは意識しています。

私自身、一度も遺品整理業界という言い方をしたことはなく、遺品整理にこだわらずサービス業としての使命を理解して、気の利く会社であることを意識していきたいと思っています。

小林：最後に、遺品整理会社の役割とはなんでしょうか。

吉田：身内が亡くなった際に遺族はある一定の期間、喪に服して故人を悼み自身の身を慎むとされていました。時代が変わってもその感覚は残っており、遺族は慎重に言葉を選びながら発言をし、行動しないといけない時期があります。そのような時期に故人の生き様であり遺品の整理を行う時、便利屋さんやゴミ屋さんでなく遺品整理専門会社のキーパーズに依頼したことによって、ご遺族が親せきやご近所さんから「遺品整理もちゃんとやってあげたんだね。故人も喜んでいるんじゃない。」と言ってもらえるような存在意義のあるような会社であり続けないといけないと思っています。

――吉田社長、ありがとうございました。

インタビュー動画を月刊仏事WEBにてご覧頂けます。
2022年2月3日、配信開始の予定。
https://butsuji.net/shukatsu/6524